慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ニュー・ハーモニー再考 : 教育思想的側面からの研究
Sub Title	Reconsideration of New Harmony : a study on the aspect of educational thought
Author	遠藤, 克弥(Endo, Katsuya) 森田, 希一(Morita, Kiichi)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1991
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.32 (1991.) ,p.11- 18
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000032-0011

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ニュー・ハーモニー再考
——教育思想的側面からの研究——

Reconsideration of New Harmony
—A Study on the Aspect of Educational Thought—

遠藤克弥
Katsuya Endo
森田希一
Kiichi Morita

All of the leaders who worked for New Harmony apparently consented that "permanent personal and social regeneration (as Pestalozzi did) could be secured through education". Based on the idea, new experiments of educational activities were conducted in New Harmony early in the 19th. However, in not agreement with their desire, most of the experiments were stopped only in two years.

The reason of unsuccess of the experiments has been discussed from several different perspectives. Then, it was sometimes indicated that one of the main reasons was a discord of the main members' fundamental approaches toward education and society rather than a financial reason or a defectiveness of educational equipments.

The purpose of this paper is to reconsider New Harmony in order to clarify the true reason of the unsuccess. Firstly we will make a general sketch of New Harmony and the educational activities. Secondly we will examine the problems and the educational ideas of Owen, Maclure, and Neef who had the most important roles in New Harmony.

永続する個人的，社会的再生は教育を通じて保証されるというペスタロッチーの態度に共に賛同しながらも，19 世紀初頭アメリカで行なわれたニュー・ハーモニーの共同体実験とその教育活動は，実質的には 2 年間という短命であった。その共同体が理想の実現に達し得なかった原因は，外的物的な条件不備という以上に，そこに参加した者たちの教育と社会に対する基本的な態度の違いにあったのではないか。かかる問題意識より，前半は，オーエンをはじめ，ウィリアム・マクリュア，ヨゼフ・ニーフら中心人物の言動，活動を整理し，後半にはその背後にある彼らの教育思想を分析，吟味して，ニュー・ハーモニーの残した教育的意義を再考する。

I 章

1. ニュー・ハーモニーの構図

ニュー・ハーモニーはドイツから移住してきたジョージ・ラップの指導する，宗教的共同体の遺産であったが，内実は完全に主宰者ロバート・オーエン (Robert Owen, 1771-1858) の理念の実験と言って過言ではない。1817 年の有名な宗教否定の演説を契機に，「博愛主義から社会制度全変革へ突進」(五島茂) し始め，さらに 1812 年「ラナーク州への報告」によって共産主義的ユートピアを明確に構想し始めたオーエンにとって，ニュー・ハーモニーはまさにその恰好の実験の舞台であったと思われる。例えば五島茂はニュー・ハーモニーを「空想的社会主義段階の所産」ととらえ，「オーエンは階級の対立・闘争そのものを目して，競争の支配する資本家社会制度の必然的所産だ悪だとなし，其悪の排除にむかって階級対立をアウフヘーベンした階級死滅の社会への平和的到達を夢みたのである。ニュー・ハーモニーはかかる使命を以て生まれた。」[1] と評価する。こうしたニュー・ハーモニーに対するオーエンの基本的な構図は，1825 年 2 月 25 日と 3 月 7 日に行われたワシントン連邦下院議事堂での「新社会制度に対する講演」，同年 5 月 1 日制定されたニュー・ハーモニー準備社会規約，1826 年 7 月 4 日の「精神的独立宣言」，1827 年 5 月

26 日，27 日の「ニュー・ハーモニー住民に対する告別の辞」などに端的に示されている。各論によって多少の異同はあるが，まとめるならば，概ね次のようになる。

1)　旧世界を支配してきた悪の三位一体——私有財産，不合理な宗教制度，それらに基礎を置く結婚制度を打破し，性や境遇によって差別されない平等の共同体を作る。

2)　従来のこうした人間の利己心，堕落を生み出してきたのは，人間には自由意志があり，責任能力を有するという誤った考えによるものであった。この考えは斥けられ，人間は環境の産物ととらえられる。そして各人は，利己心を捨て，人間としての哀れみ，思いやり，心づかい，情け深さを身につけた結合と協力関係が結ばれる。

3)　その結果，財産は共有され，共同体各成員の言論，行動，そして宗教に関する自由が保障され，ついには，精神的自由を実現した理想的共同体が完成される。

いかなる直接的な理由があれ，そこに参加したものは，共通して多かれ少なかれ，オーエンのこうしたニュー・ハーモニーに対する理念に賛同する部分があったと考えるのが妥当である。『オーエン伝』を書いたボドモアによれば，

「参集者の全員が勤勉なものとは言えないし，全員がオーエンの抱いた新社会の夢の実現のために積極的に努力しようと考えていたわけではないが，すくなくとも全員は，協同生活に憧れてきたこと，既存の秩序に不満を抱いていたことの二点で共通していた」[2]。

と述べる。一般の入植者がことごとくオーエンに期待されるようなものではなかったし，金儲けを狙って潜入した詐欺師や，似非共同体論者と言われる者，あるいは単に好奇心で入村した者もいた[3]。

そうした目先の利益や個人的実利の目的で，あるいは好奇心半分といったメンバーが実際全くいなかったとは言い切れない。だがそれが共同体を指導する立場にあった知識階級，すなわち本論の対象となる人々にあっては多少は違っていたのではないか。つまり，多少は批判しながら，共通してオーエンの理念のどこかに引かれて集まってきたと考えられる。例えば，最後まで参加を躊躇していたマクリュア (William Maclure, 1763-1840) は，

「オーエン氏が彼の計画について話すことができると思われるすべてのことは，それを実践に移すことによって，人間性から生じるに違いない多大の恩恵に関して，私が常に抱いてきた好ましい考えについて何も付け加えるものはありません」[4]。

とニュー・ハーモニーに参加する前からオーエンの姿勢に好意的であった。同時期，フレタジョット夫人も，「そうした結果（貧困者の窮乏）を防ぐ最善の手段とは，オーエンがなしてきたことを彼らのために行うことなのです」[5] と絶対的な支持をマクリュアに表明している。

1826 年から，27 年にかけて，ニュー・ハーモニー共同村には多くの文化人，知識人，教育家たちが参集した。簡略に名前を列挙してみるだけでも，オーエン親子（長兄デイル，次兄ウィリアム）をはじめ，オーエンと並立するもう一人のパトロン，マクリュア，そしてニーフ (Joseph Neef, 1770-1854)，フレタジョット夫人，フィクパル（ペスタロッチー主義教師）レシュール（生物），トルースト（地質学），プライス（医師），セイ（昆虫学）等々。これほどの知識階級の人物が集まった，希有とも言える事態が生まれたのも，それらの人々がオーエンのもつ指導性や理念に引かれる部分があったからだと考えられる。

2.　教育活動

(1)　学校の様子

1826 年 2 月 5 日に採択された新憲法において，「全ての成員に対して最高の身体的，道徳的，知的教育を行うことが村の第一の目的である」[6] と宣言されたように，オーエンにとって教育問題は，ニュー・ハーモニーの活動の大きな眼目であったことは言うまでもない。

ニュー・ハーモニーの教育の問題を思想的側面から吟味する前に，実際にどのような活動が行われていたのか簡単に整理しておこう。

ニュー・ハーモニーの教育活動は，学校に関連して，大きく二つの時期に別れる。第一期は，1825 年 4 月 27 日準備委員会発足から 1826 年 2 月 6 日の新憲法採択まで，第二期は，新憲法採択から 1827 年のオーエンの告別演説の頃までである。

第一期の準備期では，初等教育施設として，昼間学校と夜間学校そして寄宿学校が設立された。寄宿学校に関しては，機関紙ニュー・ハーモニー・ガゼットにおいて，生徒を募集する広告が出された[7]。1825 年 12 月のころには，寄宿学校には，160 人ほどの生徒が入学しており，衣食住と，教育費が公費でまかなわれていたと言う。これらの学校は，オーエン不在ということもあって，村に残った次男のウィリアムとユニバーサリストの元牧師ジェニングスら村の運営委員会のメンバーによって，監督，運営されていたと考えられる。しかし，これらの学校の具体的な様子，教授内容，方法について詳細は残されていない。この準備段階の時期は，村の機関誌

であるニュー・ハーモニー・ガゼット誌にオーエンの「ニュー・ラナーク住民の講演」，父の助手的役割を果してきた長男デイルの「ニュー・ラナークの教育制度概観」，あるいはオーエンの教育観に類似する Schaer の講演録[8]，ほかに短い教育論が掲載されている。これらを通して，ウィリアムを中心にオーエン主義の教育を村人たちに普及，理解させていたと考えられる。

第二期になると，様相は変わり，教育活動は活気を呈してくる。この期は教育活動の中心は，マクリュアを中心としたペスタロッチー主義の教師たちの手に移る。マクリュアが中心となって，整備した学校の様子は次のようであった。

幼児学校 (infant school) はフレタジョット夫人とニーフ夫人によって指導され，2 才から 5 才まで，男女あわせて 100 人以上の児童がいた。ロックウッドの指摘によれば，ここでは主に，子供達の興味 (amusements) を導くことに関心がおかれ，その内容は，ニュー・ラナーク時代の内容（ダンス，音楽，博物など）を踏襲したものであった，

上級学校 (higher school) は，ニーフによって導かれ，その繁栄期には男女あわせて，180 人から 200 人の生徒がいた。またニーフをペスタロッチーの教え子である女子 4 人，男子 1 人が助けた。内容は，読み書き，算数，ダンス，音楽等であったが，ここには後述する実業学校 (industrial school) が付属していた。そこでは，5 才から 12 才の子供がある一定の知的教育を行った後に，幾つかの有用な科目を選択して学んだ。

成人学校 (school for adults) はフィクバルが指導し，入学者は男女あわせて 80 人以上であった。通常は夜間で，数学や実用的な技術に加えて，トルーストによる化学，レシュールによる製図，セイによる博物学，フィクバルによる実験農業の講義が行われた[9]。

(2) 学校の崩壊

こうして第二期は，マクリュアとペスタロッチー主義の教師達，そしてセイら科学者が中心となって学校を指導し始める。この間の学校の様子を簡単に振り返ってみると，ニーフの学校について，ワイマールの貴族ベルンハルトは「少年，少女は皆とても健康に見え，明るく元気で，内気ではなかった…これらの幸福で興味深い生徒たちは，年齢相応な活動を楽しんでいた。」[10] と描写し，それが首尾よくいっていることを伺わせている。

しかし，軋轢，瓦解がすぐに訪れる。まもなく共同体は仕事に応じた三つの協会，教育組合，職人組合，農業組合，に分離する。教育組合はマクリュアによって統括され，彼は教育活動に専念できると考えたが，病気で不在がちであった。この頃からニーフ，フレタジョット，フィクバルという三人のペスタロッチー主義の教師たちの歩調は崩れ始める。1826 年 7 月 4 日の「精神的独立宣言」が出されたころまでには，三人は別々に学校を営むようになり，その結果，教育活動も二重となったりして，次第に当初のマクリュアの理念は弱められていった。この三人は協力することのできない強い個性の持主でもあった。

その中でも，フレタジョット夫人とニーフの反目的な競争は大きかった。彼女は分裂し，別の建物に移った。そして幼年学校に専念する必要がなくなり，すべての年齢にわたる子供達を対象に通学制と寄宿制の学校を営むようになる。フレタジョット夫人はマクリュアに当てた手紙の中で，「私の知っている中で，最も思慮のない奴」とニーフをののしり，ニーフ夫妻を次のように言っている。「ニーフの監督下にいる子供達は，ニーフの病気，そして一家の主婦としてそのような施設の先頭に立つにはふさわしくない彼の妻の貧相な管理のために，あらゆる種類の悪い習慣のうちに進んでいます」[11] また，オーエンの長男のデイルは，当時ニーフの学校で体罰が用いられていることを，指摘しており，自分が体罰を用いなくとも，生徒に教えられる方法を自ら示している[12]。更に，オーエンを当初信奉していたフレタジョット夫人までも，自分が彼の理念にだまされていたという不満を述べるに至っている。

こうした教育活動の分裂，思わしくない状況を見ていたオーエンは，1826 年 8 月 6 日の共同体の集会において，マクリュアが連れてきた教師を批判した。彼は，教師たちが半年も共同体にいたにもかかわらず，学校をふさわしく組織できなかったことを告発するのである。そして，自らが新しい社会教育を始めた。

まず，同時期，3 つの組合に分裂して，財政的に不満の高まった農業と，職人組合のメンバーは，彼らの子供を教育組合の学校から連れ戻してしまう。その子弟の教育をオーエン自身があたることになる。そして，世界地図や地球儀を製靴所に持ち込み，少数の未経験者の助けを借りて，学校を開設する。ポール・ブラウンによれば生徒は 200 人程であったと言う。しかし，これはオーエンの発病もあって，僅か 6 週間で廃校となった。

同時に，オーエンは，新しい社会教育を提唱し，大人と子供一緒に教養を高めるべく，毎週月，水，金の夕方にホールに集まって，オーエンの講義を受けた。だが，これも出席者が減り，数週間後には中止となった。

こうした経緯の結果，オーエンと教育組合との間の裂け目は大きくなった。この状況を打開すべくマクリュアは，オーエンの干渉から逃れようとして，インディアナ州議会に教育組合を法人として認めるように，請願した。しかし，当時のニュー・ハーモニーの無神論を広めているという世論を反映して，この請願は却下されてしまうのである。

こうした状況と歩調を揃えるようにして，1826 年の終わり頃までには，共同体の瓦解も始まり，離村者が相次いだ。

1827 年 5 月 26 日オーエンは残っている住民に告別の演説を行い，そこでマクリュアの連れて来たペスタロッチー主義の教師たちを批判し，教育制度の不適切な組織が，共同体の発展を弱めたと告発する。そして，こうした教育組合のメンバーたちの不和が，学校の効能を弱めたと述べる。

「あなたがまた，子供達の教育に関して，主要な難局が，マクリュアがここに連れて来た教授と教師たちの意見の相違から起こったこと，そしてその結果，その制度を働かせることを遅らせていることを知っています」[13]。

「すべての子供達が同じような習慣，性質，そして感情によって教育され，一つの不調和の感情ももたずに，一つの大きな家族のメンバーとして，真に成長することが私の最も熱心な願いであったのだが，この過ちによって，子供達は別々の習慣，性質，感情に教育されたのであった」[14]。

こうして教育活動は瓦解し，ニーフ，オーエン，マクリュアも次々ニュー・ハーモニーを離れていったのである。

II 章

さて，こうしたニュー・ハーモニーの瓦解，特に教育活動の不調和は，一体何に裏付けられるのか。我々は，金銭的，物質的不備もさることながら，オーエン，マクリュア，ニーフという主要人物たちの教育と社会をめぐる根本的な考え方に，大きな食い違いがあったと考えてみたい。

確かに L. Gutek が指摘するように，彼ら全員，教育に対するコンセンサスとして，「ペスタロッチーの永続する個人的，社会的再生は，教育を通じて保証され得る」[15] という信念を持っていた。つまり，理想社会，理想的共同体建設を夢見，その第一条件として，教育を意義づけていたのである。だが，この図式に不調和はなかったのか。オーエンから考えてみよう。

1. オーエン

オーエンのニュー・ハーモニーに対する基本的な構図は先に示した通り，私有財産を否定した平等の共同体を作ることにあった。彼はニュー・ハーモニー・ガゼット誌上に自らの教育論（社会制度論）掲載しているが，そこに盛り込まれた思想をもう一度簡単に整理すると次のようになる。

①人間には自由意思があり，責任能力があるという従来の考えが利己心を生み，人間を個別化し，ばらばらにしてしまった。そして，その結果私有財産制，無知，貧困，犯罪，欲得など人間の堕落が生じた。

②そうした考えは斥けられ，人間は環境の産物であり，人間は自己の性格は形成することができないとされる。

③こうした利己心を捨て，結合と統合の協力関係を結び，各人は共同体に進んで奉仕し，平等の共同体を作るために子供は早期から適切な環境におかれる。

④そのためには子供は個別に教育されるのではなく，集団的，画一的な環境で，教育されなくてはならない。

⑤そうした子供が獲得するべき徳とは，親切，慈善心，博愛心，あるいは合理的（存在）であり，そうして精神の自由は初めて獲得される。

ニュー・ハーモニー時代のオーエンに限れば，ニュー・ラナーク時代に比べて，イギリスで彼が現実に直面していた階級という問題意識は後退しており，その反面理想主義的，ユートピア的になっている。結果として，オーエンの真意は先に引用したように，「すべての子供達が同じような習慣，性質，そして感情によって教育され，一つの不調和の感情ももたずに，一つの大きな家族のメンバーとして，真に成長することが私の最も熱心な願いであった」というものである。

だが，ニュー・ラナークの成功という経歴もあったオーエンは自分の計画に非常に楽観的であった。それは表面的には，

1) オーエンは入村者を選考する機会を持たなかったこと。その結果，オーエンの理念が住民に浸透しきれなかったこと。更にオーエンの理念も抽象的で，実践への手がかりが乏しかった。

2) 当初二，三年間の準備期間をおく予定であったが，1826 年 1 月帰村後，表面的な成功を見たオーエンは，時期を短縮し，一挙に本格的な活動に移行してしまった。

3) 不在期間が長く，運営を他人の手にまかせ，また，財政的援助も足りなかった。

このようなことが大きな理由として挙げられるが，その根を掘り返してみると結局，次のようなことが言えるであろう。

確かに前述してきたように，オーエンの描いた平等の共同体には魅力があり，多くのものを引き寄せた。だが，村に足を入れただけで，その者がオーエン主義の教育を理解し，実践できるかというとそれは全く別問題である。むしろ，同じペスタロッチー主義を標榜しながらも，マクリュアであれ，ニーフであれ，フレタジョット夫人であれ，マクリュアの連れて来たペスタロッチー主義の教師たちは，オーエンの望んだ確固たる（共産的な）社会目標に子供を教育するというより，（後述するが，特にニーフは）もっと自由に，個性的に子供を成長させようとしていたのではなかろうか。加えてオーエンは目標を実現するための，時間をかけた人間の改革と村風作りを全く軽視した。「ペスタロッチーにとって，個人の改革は社会の改革に先んじていた」[16]というGutekの指摘とは全く正反対の方向にオーエンは結果として，歩んでいたのである。彼の眼目は，共同体という施設や外観の建設（あるいはハードウェアと言える）にむけられ，その操作の方法や内容（ソフトウエアと言える）に関してきわめて楽観的，かつ安易な見通しをしていたといえる。

2. マクリュア

「アメリカにペスタロッチー主義を移入した最初の人物」[17]と呼称され，ニュー・ハーモニーの中でも中心的な人物として活動したにも拘わらず，教育に関連してのM.マクリュアに対する決定的な評価はない。

教育とマクリュアとの関連で，最初に着目されてきたのはペスタロッチー主義との関わりである。マクリュアがペスタロッチーの学校を訪問し，その教育に感動し，ペスタロッチーにアメリカでのペスタロッチー主義の学校の設立を懇願したことは，あまりにもよく知られた事実ではある。しかしマクリュアはいったいペスタロッチー主義のどこに共感し，またいかなる目的を持ち，どのような理想社会を心に描きながらそうしたのであろうか。そしてそれらのことをニュー・ハーモニー共同体の中で，どのように実践し，どのような結果を得たのか。

マクリュアは，イヴェルドン（Yverdun）のペスタロッチーの学校を視察して，「教育が，教育的な目的と同様に，社会的，政治的，経済的目的に役立つというペスタロッチーの意見に賛同し，社会の悪と貧困の主要な原因は無知であるという思いを論拠に，社会改革は段階的な教育的手段によってのみ達成される」，(Gutek)[18]と考えた。ただマクリュアにとっての教育と社会改革の関連は，後の，とりわけニュー・ハーモニーでの彼の教育活動を見る限り，ペスタロッチーのそれよりも更に現実的な意味を包含していた。そして，改革の手段としての教育は，段階的というよりも即効的なものとして考えられていたように思われる。ペスタロッチーの学校での教育実践に関してマクリュアは，次のような感想を述べる。「私は，あれほど学校の内や外で，教育が効果をもつように計算された活動を，教師がいない中でもきちんとしている子どもたちを見たことはない。子どもたちは，常に子どもたち自身にとって有益な（useful）何かに支配されていた。彼らの注意力は，道徳的または肉体的活動を問わず，同じ活動を一時間以上していても，散漫になることはなかった。すべての活動は，自由意志に基づいていた。そして彼らの活動は，明るく，エネルギッシュに，そして素早くそれぞれの活動の目標に向かっていた。泣く子も，不平をいう子も一人も見なかったし，先生の怒った姿も見なかった。私は，他のいかなる教育方法によってよりも，はるかに優れてすべての活動が有用な成果（the useful accomplishments）を上げているのを見た」[19]。

すなわち，"useful"というキーワードが示すように，マクリュアは，ペスタロッチーの学校で展開する教育活動の中における実生活との連結性を敏感に看取し，自己の生活にとって有用な（useful）知識や技術が，自然な形で，むしろ子どもたちが自ら求めるかのように体得している様子に驚き，このようなペスタロッチー主義の実利性といった点に着目したように思われる。ペスタロッチーは，子どもたちに有用な知識を与え，彼らを貧困から解放し，彼らが本性にしたがって生きることによって徐々に，段階的に社会改革が進展することを願った。つまりそれは，子どもたちの善さに向かう本性への解放の願いであったと言ってもよい。しかしマクリュアの場合，確かに同様に貧民（the poor）の状況の改革を願い，そのための有用な知識の普及（the diffusion of the useful knowledge），有用な教育の必要性を強調した。しかしその願いはマクリュアの教育者としての側面よりも，産業革命を背景とし，産業主義的な進展を望む社会の要請に応えるかのように，むしろより才長けていた彼の実業家としての側面から出現した願いだったのではないか。ゆえに彼は，とりわけ教育の即効的な成果，または有用性と言ったことをしきりに強調した。マクリュアは言う，「教育は，生産的そして非生産的，有用な（useful）そして装飾的な，必要なそして不必要な，というように2つに分類されるかもしれない。ただ生産的で，有用で，必

要な教育が，大衆に安心と幸福を与える。」[20] 付け加えるが，マクリュアの有用な教育，教育の実利性の希求は，「私が学んできたことを実践する場はない，豚のような無知しか与えられなかった」[21] と自分が受けた古典的教育への批判に自ら答えたものでもあった。

さて，「知は力なり」(knowledge is power)[22] と言い切り，ペスタロッチー主義の影響を受け，また教育を社会改革，産業社会への改革の手段としたマクリュア独自の実学主義的教育思想は，ニュー・ハーモニー共同体という新しい社会の中で，いかなる形で試みられたか。マクリュアは，確かに参加を躊躇したが，当時ニュー・ラナークで教育実践をしていた R. オーエンに会い，かれの学校を見学した時のことに対し，次のような感想を述べている。

「私は，ニュー・ラナークでの数日の時を人生のうちで最も愉快に過ごした。そして執拗な反対にも拘わらずオーエン氏の忍耐と勇気によって行われた社会の改善をつぶさに見た。私はこれほど幸福で満足気な大人やこどもたちを見たことがない。……私はオーエン氏の成功を見て，実験農業をアメリカで経営する勇気が沸いてきた。」[23]

おそらくこの時の思いが，マクリュアにニュー・ハーモニーへの参加を決断させたのであろう。そして，彼は共同体の中に実業学校 (industrial school) を設立した。実際にこの学校は，上級学校に付属した教育機関であったため，ニーフに任されていた。この学校では，マクリュアの作ったカリキュラムに従い，有益な職業技能が教授されていた。5 歳から 12 歳までの子どもたちが，ある一定の知的教育を受けた後，基本的には自分で幾つかの有用な職業技術を身につける科目を選択した。教えられていた科目は，印刷，彫刻，大工，車輪製造，ろくろ細工，帽子作り，靴作り，農業，洗濯，料理，洋服作り，裁縫など多種にわたっていた。生徒たちは，家に帰らず，屋根裏の宿舎に寝ていた。マクリュアは，技術を身につけることによりそれぞれが自活可能になると同時に，生産の導入により，それが学校自体の自活に連結することを願っていた。

このようにして，社会改革にあたっては無知な労働者は一つの大きな障害となるため，産業社会への社会改革にとっては「知と術をもった労働者」[24] が必要であった。そのための手段としての教育は，実業学校という形の中で試みられた。そしてニーフの採用によって，ペスタロッチー主義的な教授法も取り入れられることになった。

しかし，現実に共同体は，かつて見たニュー・ラナークのようなものでもなかったし，彼が理想と描いた共同体や学校を作り維持し得るような状況は持ち得なかった。彼は，この共同体のスポンサーの一人として，オーエンに匹敵するような多額の出費をせざるを得なかったが，共同体に対しただ出費するだけのオーエンの慈悲主義的態度と，あくまでも自活の道を探るマクリュアとは折り合わなかった。また，子どもたちを貧困から解放すること，そして労働者を雇用主の与える劣悪な労働から解放するための共同体，集団主義社会を理想とした，いわば解放主義者または博愛主義者のオーエン。これに対し，自活主義を基本とし，社会改革のために「知と術をもつ労働者」の育成を目的として実学主義的教育を考えたマクリュア。この両者が，同じ共同体の中でそれぞれの目標を達成しようとすることには，あまりにも困難が多かった。

3. ニーフ

J. ニーフは，ペスタロッチー主義のアメリカへの移入を考えたマクリュアに対し，ペスタロッチーによって推薦された人物であることは周知の通りである。ゆえにニーフは，十分にペスタロッチー主義に精通していたが，Gutek によると「ロマン的で，情緒的なペスタロッチーとは異なり，冷静な合理主義者であり」，「教えない」(I shall teach them nothing.)[25] ことを基本理念とし，子どもたちにより大きな自由を容認しながらも，一方では他人の意見を鵜呑みにするのではなく，それが正しいか否かを吟味する思惟力 (reasoning) と理性力の育成を強調しているとされる。そして，子どもたちはそういった能力を潜在的に有しているのであり，従って「生徒は，崇高な真理を私から学ぶのではなく，自ら発見するであろう」[26] とニーフは言明する。そのためニーフにとって教師とは，ペスタロッチーが描いたような「家長的である優しい父親のイメージ」というよりも，「共にまなぶ仲間」(a fellow learner along with his students) であった[27]。このように，"大きな自由の容認"，"教えようとしない"，"自ら発見させる" そして "教師は共に学ぶ" といったニーフの思想のキーポイントに着目する限り，ニーフの教育が，子どもたちは自ら善に向かう存在であるという子ども観に立脚しながら，教育の結果よりもむしろ子ども一人一人がいかに学んでいくかということに主眼をおくという意味で，過程像志向的なものであったのではないかと，理解される。少なくとも，マクリュアと出会った頃，アメリカに渡った当初はそうであったに違いない。従って，マクリュアが当初から抱いていた「教育による知と術を持つ労働者の養成」という結果像志向的な，また人間（こども）を "the soft clay" (軟ら

かな粘土）と考え (C. Burgess)，人間の可塑性を強調する粘土細工的な教育観とは根本的な面で異なっていたように思う。

このようなニーフが，フィラデルフィアでの教育実践を経て，ニューハーモニーに参加したのは，勿論スポンサーであるマクリュアの説得もあったが，前述したように，元来オーエン，マクリュア，ニーフの間には永続する個人的，社会的再生は教育を通じて保証されるとしたペスタロッチーの態度にたいする暗黙のコンセンサスがあったからだといわれる。

ニュー・ハーモニーでのニーフの学校の内容は，前にも述べた通りだが，学校を観察したベルンハルトの感想をもう一度引用してみよう。

「少年，少女は皆とても健康に見え，明るく元気で，内気ではなかった。…少女たちは少年たちと同様に，仕事と教授について圧迫されていなかった。これらの幸福そうで興味深い生徒たちは，年齢相応な活動を楽しんでいた。」[28]

この言葉から察すると，ニーフが当初抱いていた子どもたちには可能な限り自由を与え，共に学ぶという精神が，この学校では生かされていたように感じる。ニーフは，マクリュアの構想した労働者階級の子弟の社会的，経済的必要に適した実業教育の実践を通して，生徒が自ら疑い，吟味し，分析する能力の育成，「理性主義」(rationalism) の原則に従い，教育活動に従事していたように思われる。そして，彼の学校は，ニュー・ハーモニーのすべての教育的事業の中で，「もっとも際立ってペスタロッチー主義的」(Gutek)[29] であったと考えられる。

だがアメリカ滞在が長くなるにつれ，ニーフは物・心の両面の後援者であったマクリュアの影響を受け，マクリュアの教育的意図と関連して，彼の教育的関心も完全に産業革命進展のさなかの労働者階級の教育に向けられ，社会改革の手段としての教育を更に強く意識するようになった。そしてアメリカにおける初期産業資本主義的な社会の勃興期に，その担い手となる人的資源の要請に応ずるかのような感じであった。しかし，本来過程像志向の教育を理想とするニーフにとって，労働者の育成という極めて鮮明に結果像を志向するマクリュアの作成したカリキュラムに従って教育を行うことは，ひとつのジレンマを伴う状況であり，満足のいくものではなかったに違いない。そしてニーフは，内面で自分自身の理想とする社会を夢見続けてはいたが，次第にオーエンの博愛主義を疑い始めていたし，マクリュア等による共同体の分離，異なった職業組合の設置に関しても，党派性の強いものであると，自由主義的見地から批判した。更に，ニーフ自身は，フレタジョット夫人からは「私が知っている中で最も思慮のない奴」[30] と中傷されたように，他の中心的な人達ともあまり折り合いがよくなくなっていった。

このようにしてニーフも，1827 年のオーエンとマクリュアの決別に追随するかのように，1828 年にニュー・ハーモニーに別れを告げた。

ニュー・ハーモニーでのニーフの失敗の原因として W. S モンローは，ニーフの教育の仕事が継続性に欠けていたこと，当時アメリカではまだ大規模な教育改革が必要なほど産業革命が進んでいなかったこと，そして専門職や産業に従事する子どもの教育に専念しすぎたことをあげている[31]。しかし，モンローが指摘する原因の少なくとも後 2 つは，スポンサーであるマクリュアの影響と圧力によるものであると考えてもよい。ニーフの思想と行動は，やはり子どもは，彼の善，自然というものを，自ら模索して行く存在であり，ゆえに教師は教えることはなく，子どもの仲間として，"共に学ぶ存在" であるという人間（子ども）主体の教育を我々に看取させる。それに対してマクリュアの教育は，実践の中ではいかにも人間（子ども）の自由と自立が尊重され，人間（子ども）主体であるように感じさせるが，社会改革と中下層労働者の養成という教育の目的の中には人間主体の構図はみられない。このような両者が，一つの学校の運営に関し，長く折り合ってはいけなかった。

ま と め

結局，オーエンの構想はうまくいかなかったが，ここで取り上げた 3 人のいずれの思想も，それぞれにこの時代のアメリカの一断面を代表しているといえる。裏を返せば，当時のアメリカがヨーロッパでの産業革命の嵐の強風をうけ，あらゆる分野において発展を迫られながら試行錯誤している様子がうかがえる。ニュー・ハーモニーでの実践も試行錯誤の多いものであったが，様々な教育上の示唆を次の世代に残したと思う。例えば，

1) 近代的な学校制度の方法をアメリカに持ち込んだこと。ロックウッドなどが指摘するように，ニュー・ハーモニーの教育は，アメリカにおいて，幼年学校，実業的，商業的学校の先駆となったこと。その内容は，非常に実学的，科学的であったこと。また，アメリカにおける最初の無償学校の制度であったこと。あらゆる人々に開かれた公の (public) 性格があったこと。ペスタロッ

チー主義教育の先駆となったことなど。

2) こうした近代教育の諸側面をもちながらも，それは失敗した。その理由の一つは，オーエンの共産的，社会主義的な理念が，むしろ個々人の「自由」を重んじるアメリカという風土，土壌に合わなかったこと。オーエンと会談した晩年のジェファソンが「あなたの意図する改革をもたらすにはどうすれば良いかを知る上で十分な実際経験は持ち合わせていません」，「私には合衆国や他の国の独立国が，幸いにも同じ原理の下に統治され得るとは思えないのです」[32] と述べたが，この言葉が何よりもそれを示唆している。

3) 別の角度から見れば，ホーレス・マンがまもなく「共和国をつくることは容易だが，共和主義者をつくることは至難である」と述べる。同様にオーエンは，平等の共同体を実現させるためには，時間をかけた人間の改革をしなければならなかったのだろう。オーエンは，理想社会あるいはユートピア社会という目に見える形にこだわりすぎたと言える。そうしたことの背景には，教育と社会建設をめぐって大きな問題，つまり制度という形を残すことのたやすさと，それを支える人間を育成することの困難さと重要さという，現代の我々がなおも直面する大きな課題が横たわっているのである。

註

1) 五島 茂『ロバアト・オウエン著作史』(1932) 復刻版 東洋書店 1974 p. 138.
2) Frank Podmore "Robert Owen A Biography London 1906 p. 291.
3) 上田千秋『オウエンとニュー・ハーモニィ』ミネルバ書房 1984年 第2章他
4) A E. Bestors Jr., "Education and Reform at New Harmony-Correspondence of William Maclure and Marie Duclos Fretageot 1820-1833" (1948) Augustus M. Kelly Publishers 1973. p. 322.
5) ibid., p. 304.
6) 上田前掲書 p. 275.
7) ガゼット誌の1号から4号まで「ニュー・ハーモニー寄宿学校委員会監督の下に両親が当社会のメンバーではない若干名の生徒は委員会への願書(郵便であれば切手貼付)にもとづいてこの施設に収容される。料金—寄宿，洗濯，衣服，健康管理，そしてこの施設における様々な教育のために，年100ドルの4回ずつ先払い」(岩本俊郎訳)が掲載された。
8) "THE NEW-HARMONY GAZETTE" (reprint, New York 1969) VOL 1-VOL 3 (1825/10/1-1828/10/22) 1825年12月14日号ワシントンの博愛主義協会での講演 (1818年5月23日) を掲載.
9) ニュー・ハーモニーの学校の様子については，George B. Lockwood "The New Harmony Communities" (1902) AMS Press 1971. "The New Harmony Movement" (1905) Augustus M. Kelly Publishers 1970. John F C. Harrison "Utopianism and Education—Robert Owen and the Owenites" Teachers College Press 1968. Paul Brown "Twelve Months of New-Harmony" Porcupine Press Inc. 1972. 岩本俊郎「ニュー・ハーモニー平等村におけるR. オーエン労働教育の問題を中心として」『東京大学教育学部紀要』1974年。阿波根直誠 "A Study of the Early Pestalozzian Movement in the United States (II), Documentary Reserach of Joseph Neef's Life History in his New Harmony Period"『琉球大学教育学部紀要』1974年ほか参照。
10) Frank Podmore ibid., p. 314.
11) "Education and Reform at New Harmony" p. 352.
12) Robert Dale Owen "Threading My Way An Autobiography" (1874) August us M. Kelly Publishers 1967 p. p. 277-280.
13) Gerald Lee Gutek "Joseph Neef-The Americanization of Pestalozzianism" The University of Alabama Press 1978 p. 58.
14) ibid., p. 59.
15) ibid., p. 33.
16) ibid., p. 34.
17) Will S Monroe "History of the Pestalozzian movement in the United States" (1970) Arno Press & The New York Times 1969 pp. 39-40.
18) Gerald Lee Gutek p. 19.
19) "THE NEW-HARMONY GAZETTE" 1825年7月25日号
20) John F C. Harrison "Utopianism and Education—Robert Owen and the Owenites" p. 231.
21) "Education and Reform at New Harmony" p. 293.
22) Charles Burgess "William Maclure and Education for a Good Society" History of Education Quarterly Vol. 3 No. 2 1963 p. 61
23) "Education and Reform at New Harmony" p. 307.
24) Charles Burgess p. 63.
25) Gerald Lee Gutek p. 14.
26) Joseph Neef "Sketch of a Plan of Education" (1808) Arno Press & The New York Times 1969 p. 77.
27) Gerald Lee Gutek p. 80.
28) Frank Podmore ibid., p. 314.
29) Gerald Lee Gutek p. 46.
30) ibid., p. 54.
31) Will S Monroe pp. 124-125.
32) 上田前掲書 pp. 204-205.